

---

# 私は何も持ってない

汗踏照輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は何も持っていない

### 【コード】

N3494W

### 【作者名】

汗踏照輝

### 【あらすじ】

厨二病の高二女子がテスト中に居眠りして、目覚めるだけの話です。

## (前書き)

作者はコメディイのつもりで書きました。一部不謹慎な犯罪表現があります。ご注意ください。

「はじめまして、みなさん。」

私はスポットライトが照らされた舞台に立っている。細身の黒のパンツスーツに身を包み、ポケットに手を入れ、不敵に笑って立っている。私の目の前には漫才師が使用するようなサンパチマイク。舞台上にその他のものは何も無い。ライトに照らされたマイク、自分の足元以外は何も見えない。観客の顔も気配もなく、目の前には闇と沈黙が広がっている。

私は自信にあふれた笑みのままマイクに向かって、先ほどのあいさつの後を続ける。

「私の名前は井伏駒子。現在中だるみの高校二年生。若干過保護な両親と愛おしいブス猫みーちゃんと一緒に住む一人っ子。風情がない中途半端な田舎に住んでいる。趣味は読書と音楽鑑賞。特技はトランプゲームの大富豪。これといった資格はなし。部活には入っていない。習い事もしていない。勉強は苦手で嫌い（特に数学）。さらにスポーツはもっと苦手で嫌い。友人はいるが、彼氏はいない。容姿は御覧の通り。」

ここまで一気にまくしたてて、私は目を閉じ、下を向く。観客からの反応は一切ない。私は下を向いたまま、ため息をつく。そして降参だ、とでもいうかのように、両手を挙げる。その姿勢でなかばやけになって、叫ぶ。

「わかっています。わかっていますとも！皆さんが求めているのは

こんな小娘じゃあない。ここは才能ある人々のみが集う場所、立つことを許される場所！私は完全に場違いだ！」

未だに観客の反応はない。私は手を降ろし、一呼吸おいてまっすぐ前を見つめる。相変わらず闇しか見えない。私の顔から笑みが消える。しかし、闇を見つめる私の眼差しは強い。まだ話を続ける。

「しかし、しかしですよ、みなさん。逆に、逆に考えてみてください。新しいですか、これは？特技が大富豪ですよ？しかも2、3回友人達相手に勝ったぐらいで特技にしてしまってるんですよ？それぐらい私は何も才能を持っていない！つまり丸腰で戦場にいるんですよ！根拠のない自信と傲慢さだけ持ってここに立っているんです！だが、そんな子が今までこの場所に立ちましたか？立っていないでしょう？前例がないでしょう？前例がないことって・・・すごいことでしょう・・・？」

ようやく観客から反応がある。とはいっても、客の顔も客席も闇に包まれたまま。私の耳には、前方の闇から私を嘲笑する無数の声が聞こえてくるだけだ。すると私の顔にさっと赤みがさす。私は恥ずかしさでうつむく。ところがすぐにその恥は消え去り、客への不満と怒りへ変わる。

「笑ったな？私を笑ったな？！私には根拠のない自信と傲慢さだけがあると云っただろ？！そんな私を笑うなんて、私は怒るに決まっているだろう?!！」

もはや何を言いたいのかも分からずに、マイクの前で地団太を踏む。嘲笑は止まない。涙が頬を伝って流れてくる。とにかく観客に何か復讐してやりたい。その思いだけが今の私の頭を支配している。

すると、私のスーツの右ポケットの中にずっしりとした重みが生まれる。ポケットには何も入れていなかったが、今は何かが入っている。私はポケットに手をつ突っ込んでみる。今まで触ったことはなかったが、すぐにそれが拳銃だと分かる。

私は勝ち誇った笑顔を浮かべる。復讐の手段を見つけたからだ。迷いも後ろめたさもない。私は慣れた手つきで銃を目の前の闇に向ける。嘲笑はそれでも止まない。だが私はもう気にしない。

私は銃の引き金を引く。その瞬間私は銃声と人々の悲鳴を期待するのだが、引き金を引いて鳴った音は穏やかな学校のチャイムだった。

「はい、やめー。一番後ろの人集めてー。」

試験監督の先生が教壇の前から呼び掛けた。私はハツとして先生を見つめ、すぐに自分の答案用紙に目を落とす。お粗末な数式がところどころ書いてはあるが、大部分を占めている空欄の白さが眼に痛かった。その白さがここは舞台の上ではなく、高校の教室であること、数学の中間テストがただ今終了したこと、自分は凶行に走っていないことを自覚させた。

テストから解放されたクラスメイトの様々な声が教室内を包む。そんな喧騒の中、机の間をぬって友人の栄子が私に向かってきた。

「お疲れー。今回やばくなかった？」

栄子は屈託のない笑顔で私の机に手をつく。私は苦笑いしながら答えた。

「やばかったー。全然分からなかったから、途中で寝ちゃって夢までみたよ。」

「えー、どんな夢だった？」

「いやー、その夢のことなんだけどさ……。……。栄子……。私将来ニートになって、社会を逆恨みして、都会で無差別殺人やらかすかも……。。」

「大丈夫。もし本当にそうになったら、駒子が高校時代そうやって言ってたってマスコミにちくるから。」

「栄子のそういうところ、大好き。」

(後書き)

処女作です。初心者でまだまだ未熟ですので、感想・アドバイスをいただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3494w/>

---

私は何も持ってない

2011年10月9日15時55分発行